



公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団

URAKAMI FOUNDATION

財団
ニュース
2021

2021年1月発行

CONTENTS



- 理事長挨拶
- 学術研究助成事業
- ・近年助成した研究から
ご紹介



● 食文化の振興・啓発活動

- ・令和2年度東日本大震災復興支援事業
- ・活動紹介 一般社団法人フードバンクいしのまき
- ・浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)
- ・読売写真ニュースを学校に寄贈
- ・フードピア金沢を支援



- 広報活動
- ・研究報告書の発行
- ・財団ニュースの発行
- ・編集後記

理事長挨拶

2021年は世界中に新型コロナウイルスの感染が拡大するという緊急事態の中で新年を迎えるました。最近ではニューノーマルという言葉が謳われておりますが、平穏な「日常」がありがたいものだったとつくづく思います。

私達浦上財団は、ほんの1年前の昨年1月16日に仙台のJALシティホテルにて東日本大震災復興支援事業の令和2年度贈呈式を行いました。贈呈式では復興に向けて活動をなさる皆さまから現状の説明や復興やよりよい未来を目指す意気込みの力強い声を伺い、感動しました。

また、2月3日から4泊5日でラオスを訪問し、ラオスで自立した給食を行うようになったポンサイ小学校に行き、キッチンと食堂完成記念式典に参加しました。東南アジアの発展途上国であるラオスで、浦上財団では2012年から浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)をスタートし、就学率向上や子供たちの学力、体格向上、そしてお母さん方の栄

見守っているおばあさんの力が成功のもとだと実感しました。ランチプロジェクトは、校庭に野菜を作り、鶏を飼い、池には魚を育てるという私達の計画を、子供達は一生懸命雑草を抜いたり、餌をやったりしている。そしてお母さん方も給食当番をつくり、村中の人達が無償で協力して子供たちの給食に携わったことが成功のもとだと実感しました。ランチプロジェクトでは、このポンサイ小学校の成功事例がこれからプロジェクトの見本になると嬉しく思いました。

一方、財団では3月以降はコロナウイルス感染予防の為、すべての予定がZoom会議等で変更を余儀なくされながらも何とか推進してまいりました。浦上財団のメインの事業である研究助成事業も選考委員会・贈呈式とともにZoomにて短縮版での開催となりました。贈呈式で研究者の皆さまから研究内容をご説明いただいたのを楽しみにしていたのでとても残念です。

私達は、いつになったらコロナ感染症に打ち勝ち、いろいろな活動を通常通り再開することが出来るのでしょうか?一日も早くそんな日が来ることを夢見ています。

いつも私達の活動にご支援をいただいている皆様に心より御礼申し上げますとともに、今後ともよろしくお願い申し上げます。



ラオスのポンサイ小学校キッチン＆食堂完成式典にて
(中央:浦上節子理事長、右:カムアン県教育局副局長
左:委託先のワールズリンクの森井海外事業部長)

養知識の向上を目指し、2019年度からはポンサイ小学校を重点的に支援し、村民の熱心さもあり、ついに自立に成功しました。やはり、給食の成功はお母さん方の理解と協力が大きく左右すると思いました。ポンサイ小学校の場合、いつも子供たちに目をかけて指導するおじさんの存在、そしてお母さん方が料理するそばで

主な活動紹介

学術研究助成事業

学術研究助成事業は財団設立以来の当財団のメインとなる活動の一つです。1研究テーマ当たり330万円(本年より希望する申請者に対し国内外論文・学会発表費用として30万円の定額補助の新設)を限度とする助成金は各種の食に関する研究助成の中でも比較的高額に当たり、これは、財団設立当時の選考委員の皆様からの助言で、少額を多くの人に配るより、厳選したテーマを対象にまとめた額の助成金を贈呈した方が、より効果的な研究ができるとのアドバイスを受けてのことです。

応募に当っては、ホームページや研究機関へのはがき等で広く応募者を募り、昨年6月1日から7月10日の申請期間に227件の応募があり、9月上旬、学識経験者で構成される選考委員会で、今後の食品産業にとって重要な分野の研究や若手研究者の育成という視点に立ち、厳正な審査を経て研究助成19名の研究者への助成を決定しました。

贈呈式は10月24日にハウスグループ本社ビル会議室(Zoom会議)にて行われました。冒頭、浦上理事長から「浦上財団の研究助成は設立当初から地方、若手、女性研究者に重点を置く方針で選定してきました。今回も北は北海道大学、南は琉球大学など全国より選定しました。皆様のご活躍を大いに期待しています。」との挨拶に続き、伏木選考委員会議長より選考経過の説明と研究者への激励がありました。

おかげさまでこの35年間の助成件数は438件、助成金の総額は11億9千万円を上回る実績となりました。助成した研究成果は、浦上財団研究報告書としてまとめられ、これまで27号まで発刊されています。今年度も28号を発行いたします。本活動を通じて、いさかでもわが国の食品産業及び食文化の発展と国民の食生活の向上・安定に寄与したいと念願しております。



Zoomでの贈呈式 理事長から画面越しの贈呈書授与

――

(公財)浦上食品・食文化振興財団

学術研究助成額年度別一覧

回	年度	申請件数	助成件数	助成金額	備考
1	昭和 61	20	5	16,319	財団設立年
2	62	36	4	11,720	
3	63	29	6	20,420	
4	平成 元	31	5	15,200	
5	2	32	6	15,633	
6	3	47	8	23,270	
7	4	61	8	20,645	
8	5	56	8	20,106	
9	6	64	9	26,019	
10	7	65	13	35,067	財団10周年
11	8	66	10	24,628	
12	9	60	9	24,700	
13	10	48	9	25,239	
14	11	71	10	25,643	
15	12	87	10	26,638	
16	13	93	11	26,450	
17	14	94	10	27,100	
18	15	134	11	28,050	
19	16	74	11	28,610	
20	17	147	12	31,090	財団20周年
21	18	164	14	32,488	
22	19	193	16	42,277	
23	20	210	17	44,370	
24	21	219	18	46,300	
25	22	249	17	43,510	
26	23	214	16	42,430	
27	24	207	18	43,000	
28	25	222	19	52,690	
29	26	231	19	53,900	
30	27	272	21	66,900	財団30周年 (記念大賞2千 万円を含む)
31	28	245	17	45,511	
32	29	198	16	45,727	
33	30	185	17	48,750	
34	令和 元	207	19	55,172	
35	2	227	19	60,896	国内外論文・學 会発表費用(定 額30万円)新設
累計		4,558	438	1,196,467	1000円未満は 四捨五入表記

～近年助成した研究からご紹介～

当財団が助成している研究の多くは学術的・専門的ですが、「食」は私たちの日常にも大きくかかわってきます。そこで2020年3月発行の浦上財団研究報告書Vol.27掲載の研究報告より2名の先生に研究の成果を解りやすく書き下ろしていただきました。

設立30周年記念研究助成 平成27(2015)年度助成――

「紙を部材にして超安価な検査チップの開発」

北海道大学大学院工学研究院 渡慶次 学



大変名誉なことに、「アフラトキシン検査チップの開発」という課題で浦上財団設立30周年記念研究助成(平成27年度助成)に採択していただきました。採択いただいたのは、名古屋大学から北海道大学に移動して、新しく「紙を部材にした超安価な検査チップの開発」いう研究テーマを立ち上げたときだったので、本助成のおかげで研究を軌道に乗せることができました。現在では、「紙を部材にした超安価な検査チップの開発」は私の研究室の主要な研究テーマの1つになっています。

アフラトキシン検査チップは、ろ紙上に構築した流路を利用して競合イムノアッセイを行うもので、アッセイに必要な試薬類(抗体や基質)は流路中にあらかじめ固定化あるいは滴下・乾燥されています。流路先端にサンプルを滴下すると、サンプルはキャピラリーフォースにより流路末端に向かって流れていきます。最終的に酵素反応により流路末端で基質が発色するので、その発色の度合いをデジタルカメラで撮影し、画像解析を行うことでサンプル中のアフラトキシンの濃度を定量することができます。この方法は、サンプルを所定の位置に滴下するだけで、洗浄等の必要がなく、液体の送液にポンプ等も必要ありません。さらに、サンプルや試薬類は最終的に検査チップ内から出てこないため、廃液も発生しません。そのため廃棄までを含めたトータルコストは、従来の検査法に比べて大幅に低くなります。また、現在では検査チップ用の画像解析アプリも開発しており、アプリがインストールされたスマートフォンと検査チップを組み合わせた超安価な検査システムが実現しています。検査チップは、アフラトキシンのみならず、様々な測定対象に応用することができます。システムとしての検査性能をさらに向上させ、食品分析分野に貢献したいと考えています。

研究助成をいただきました浦上食品・食品文化振興財団に心より感謝申し上げます。

平成28(2016)年度助成――

「雌ラットを用いた更年期女性の冷えと香辛料に関する基礎研究」

奈良女子大学 生活環境部心身健康学科 内田有希



香辛料のシナモンは菓子や飲料で独特の甘い香りづけに使用されている。冬にホットシナモンティーを飲むと、心身がぽかぽかするような心持ちになる。更年期女性は冷えの不定愁訴を訴える人が多い。更年期女性における冷えの要因の一つとして、卵巣機能の低下による女性ホルモンの減少が関与すると考えられている。エストラジオールは寒冷時に体温維持作用があり(Uchida et al., *The Journal of Physiological Sciences*: 60 (2), 151-160, 2010)、女性ホルモンのプロゲステロンは産熱作用がある為である。私は雌ラットを用い、シナモンの成分であるシナモアルデヒドと更年期女性の冷えに関する基礎研究を行った。実験的に女性ホルモンを消失した動物(雌ラット)、女性ホルモンのエストラジオールを投与した動物のどちらにおいても、シナモアルデヒド溶液を皮膚に塗布した時に尾部皮膚温が低下した。ラットにおいて尾部は熱放散器官であり、皮膚温が低下すると体から熱が逃げにくくなることが知られている。つまり、雌ラットにおいてシナモアルデヒドの塗布は体から熱を逃げにくくし、体温維持に寄与する効果があることが分かり、国際学術雑誌に報告した(Uchida et al., *Journal of Thermal Biology*: 83, 54-59, 2019)。この動物の基礎研究をもとに、シナモアルデヒドが女性の冷えにどのような効果があるのか考察すると、女性ホルモンが減少している更年期女性と、女性ホルモンが豊富な若年・中年女性の両方で、シナモアルデヒドは体から熱を逃げにくくする作用があり、冷えの改善に有効であると考えられる。最後に、本研究課題に助成下さった浦上食品・食文化振興財団に感謝致します。



論文掲載誌

食文化の振興・啓発活動

* 東日本大震災復興支援事業 *

東日本大震災から10年近くが経ち、岩手県、宮城県、福島県それぞれの県で、復興に向けた地道な取組が行われてきました。これまで現地視察などを実施し、地域の復興状況などありのままを見せていただきました。しかしながら、同じ10年近くを経ても地域ごとの復興状況にも差があり、復興はまだまだという地域も実在しています。特に、福島県のように原発事故による風評被害などの複合的な難しい事情が重なる等、各県それぞれに事情に見合った支援のニーズは今後ますます必要とされています。

浦上財団は今年度までに延べ66件、約4千6百万円の支援を行ってきました。今年度は昨年10月、1か月間の申請期間に29件の申請がありました。11月の選考委員会で今年度の支援団体9件を決定し、本年1月20日にハウスグループ本社ビル会議室（Zoom会議）で贈呈式を行いました。「継続は力なり」を信念に、微力ではありますが、地域ごとのニーズを考慮し、しっかりと寄り添いながら引き続き復興支援事業を続けてまいります。

また、浦上財団は、東日本大震災復興支援事業に加え、

昨年は①新型コロナウイルス感染症に係る支援金として公益社団法人日本看護協会に医療従事者用マスク、フェースシールド、防護服などの購入資金の寄附。②コロナ禍における子ども食堂サポートセンターの活動に対し、一般社団法人全国食支援活動協会に活動支援金の寄附。③令和2年7月豪雨災害で被害を受けた地域で緊急災害支援を行っている一般社団法人OPEN JAPANに災害支援活動費の寄附。それぞれ50万円の寄付を行わせていただきました。



Zoomでの選考委員会 理事長、選考委員長、財団事務局のみ集合

活動紹介

一般社団法人フードバンクいしのまき

代表者 末永 博

●令和元年度支援対象団体



私の所属する一般社団法人フードバンクいしのまきは、その名称通り東日本大震災で甚大な被害を受けた宮城県石巻市に拠点を構え、石巻市圏域を含む宮城県沿岸北部を中心に活動しています。震災から10年という節目を迎える現在、被災地ではハード面の整備が進み、その進捗は目に見えるもので一目で「復興」の状況を把握することができます。

一方で、被災者の生活を取り巻く環境（ソフト面）は、仮設住宅は解消され、復興公営住宅が整備されました。まだ生活再建も遠いと実感しています。新たなコミュニティにも慣れず、生活の困りごとが生じた場合に、どこに相談してよいのか解らず、その結果「孤独」や「孤立」と言った新たな課題に直面する人も存在しております。

私たちは「食」の持つ力を活かし「フードバンク活動の紹介」と「ひとりじゃないよ」という意味も込めてチラシを作成し復興公営住宅へ戸別訪問しています。また近隣の生活相談機関のチラシも同封し「助けて」と言える相談所の案内も行っています。



復興公営住宅への戸別訪問の様子

その結果「実は2、3日、何も食べていない」「どこに相談すればいいのか分からなかった」などの声を拾う事ができ、生活相談機関へ繋げることができた世帯も多数ありました。

もちろん、私たちは生活再建への直接のお手伝いはできません。しかし、これまでこのフードバンク活動を通して培ってきた地域の社会福祉協議会などといった相談機関といった社会資源との連携において、この戸別訪問を行っています。

最近はコロナ禍の影響で復興住宅でのイベントやサロン活動も中止が相次ぎ、楽しみもまた減って人との係わりが増々希薄してきています。

生活課題を抱えた被災者世帯は「個別化」「複合化」しており、フードバンクのみでは解決できないものです。その為にも先述の通り、行政を含む民間NPO等といった社会資源との連携強化が図られることが急務だと思います。



■ 浦上ランチプロジェクト(ラオスにおける学校給食プロジェクト)

ラオスは東南アジアの後発発展途上国のです。

これまで2012年度から就学率向上や子供たちの学力・体格の向上、お母さん方の栄養知識の向上を目指し、委託事業として自立型学校給食モデル事業を開始しました。この事業は将来的には自らの力で学校給食が継続できることを目標にしています。プロジェクト開始後8年が経過し、2018年には委託先を民間センターから現地事情に精通したWORLDS LINKに変更し、プロジェクトを着実に推進してまいりました。2020年にはポンサイ小学校で自立のめども立ち、モデルケースといえる成功事例を創り上げることができました。

これまで、駐日ラオス大使館ヴィロード・スンダーラー特命全権大使、ラオス教育スポーツ省ミトン・スバニサイ局長、在ラオス日本国大使館引原毅特命全権大使とお会いし、プロジェクト成功の支援をお願いするとともに広報活動にも努めてまいりました。また、在ラオス日本国大使館が行っている小規模無償援助により、ため池の拡張工事事業を行っていただいたほか、村人たちの自主性、助け合いの精神などの意識改革が醸成されたことにより素晴らしい成果を得ることができました。

昨年2月上旬には(新型コロナウイルス感染拡大前)、浦上理事長、ハウスグループ本社大塚CSR部長とともにラオスを訪問し、キッチン・食堂完成のお披露目式の式典に参加し、ラオス政府関係者、ポンサイ小学校の生徒たち、父兄の皆様、学校関係者の歓喜の中で盛大に式典が執り行われました。ハウスグループ本社のご協力を得て式典終了後カレーランチの試食会も行ってまいりました。



カレーを子供たちに渡す大塚CSR部長



完成したキッチン&食堂

また、昨年10月には待望のポンサイ小学校の成功事例を「成功への道しるべ(日本語版、ラオス語版)」として作成し、駐日ラオス大使館ヴィロード・スンダーラー特命全権大使、ラオス教育スポーツ省ミトン・スバニサイ局長、外務省アジア大洋州局南東アジア第1課石川真唯子主査、在ラオス日本国大使館、国際協力機構(JICA)にも情報提供させていただきました。そして、当財団の評議員である浦上聖子評議員からは駐日ラオス大使館スンダーラー特命全権大使夫人にもラオス語版を直接お渡ししていただいたほか、ラオス教育スポーツ省を通じてラオス全土の小学校へも配布いただけるようお願いをしています。

今後は、引き続き在ラオス日本国大使館の溜池施設への小規模無償援助協力、JICA技術協力など様々な人たちとの連携を推進し、着実に一歩ずつではありますが浦上ランチプロジェクトの成功に向け官民共働でプロジェクトを実施してまいります。

完成した「成功への道しるべ」

成功への道しるべ

ラオスの教育環境と社会情勢についての概要と、その背景を説明する。また、ラオスの教育政策と目標、特に小学校給食プログラムの実績と効果について述べる。

成功への道しるべ

ラオスの教育環境と社会情勢についての概要と、その背景を説明する。また、ラオスの教育政策と目標、特に小学校給食プログラムの実績と効果について述べる。

食文化の振興・啓発活動

読売写真ニュースを学校に寄贈

浦上財団の標語『食』は「人」に「良」いこと、元気のもとをパネルに用い、「食育活動」を熱心に取り組んでいる48の小学校、中学校、高校、図書館に教材資料として毎週写真ニュースを提供しています。設置小学校等からは児童生徒たちの関心がとても高いこと、学校教育にとても有効であることなどから引き続き提供願いたいとの要望が寄せられています。



小学校等に寄贈しているパネルの一例

寄贈校からの声

- 児童は、週毎に張替えられる記事を熱心に読み、世俗の情勢に鋭く目を向けています。学外のこうした外の世界に関心を持つことは、興味の幅を広げ、児童の今後の成長に大きく寄与しています。
- 図書館の出入り口の一番目立つ場所に掲示板を囲んで子ども達があれこれ語り合っている場面が頻繁に見られ、図書館の名物スポットの一つとなっています。
- 社会の出来事を見つめる一貫した視点をもって豊かなメッセージを発信してくれる貴重な教材ですので、有効に活用させていただいている。

広報活動

研究報告書の発行

助成した研究のうち一昨年秋までに報告をいただいた12件を浦上財団研究報告書Vol.27にまとめ、昨年3月に発行し、全国の研究機関附属図書館や都道府県立図書館にお送りしました。また、昨年の秋までに当財団に提出された研究報告書を収めた研究報告書Vol.28を今年3月に発行する予定です。



財団HPのリニューアル・財団リーフレットの配布、財団ニュースの発行

研究助成事業や復興支援事業の告知、申請や結果発表をはじめ、当財団の活動をHPでお知らせをしています。また、2015年より研究助成事業と震災復興支援の申請をオンライン申請にし、助成対象者との連絡の利便性を高めるためマイページでのやり取りに変更しました。

ほかにも財団の事業活動などを紹介したリーフレットや写真を多く使用して1月にその年度の活動をまとめた財団ニュースを発行しております。



●編集後記

昨年度は、新型コロナウイルス感染症の拡大防止を受け、様々な取組に支障が生じた年でした。理事会、評議員会も書面によるみなし決議、学術研究助成事業については贈呈式をZoom会議での開催となるなど、様々な制約があり、理事の皆様、監事の皆様、評議員の皆様、選考委員の皆様の温かいご支援ご協力によりまして、何とか事業の実施を行ってまいりました。あらためて感謝を申し上げますとともにお礼を申し上げます。

このコロナ禍の中、永年切望していた浦上ランチプロジェクト(ラオス

における学校給食プロジェクト)で一つの成功事例を創り上げたことは、ラオスの学校給食事業の一翼を担えたことに浦上財団として大きな喜びを感じています。本年も浦上理事長はじめ役員の皆様のご指導をしっかりと受け止め、謙虚に誠実にこれからも頑張っていく所存です。

(大豆生田 清志、浦上 佳江、戸田 俊一)



〈お問い合わせは下記まで〉



公益財団法人 浦上食品・食文化振興財団

〒102-8560 東京都千代田区紀尾井町6番3号 ハウス食品グループ本社ビル

電話: 050-3532-6365 FAX: 03-3264-6188

URL: <http://www.urakamizaidan.or.jp> (お問い合わせはHPのお問い合わせフォームをご利用ください)